

氏名(本籍地)	朴 美貞 (大韓民国)		
学位の種類	博 士 (文学)		
学位記番号	乙第 76 号		
学位授与年月日	2022 年 9 月 30 日		
学位授与の要件	昭和女子大学学位規則第 5 条第 2 項該当		
論文題目	第二言語としての日本語における終助詞「ね」の習得 — 韓国人日本語学習者を対象に —		
論文審査委員	(主査)	昭和女子大学	教授 近藤 彩
	(副査)	昭和女子大学	特任教授 金子 朝子
		昭和女子大学	教授 鈴木 博雄
		前昭和女子大学	特任教授 横山 紀子
		武蔵野大学	教授 向山 陽子

論文要旨

本研究は、熟達度レベル別韓国人日本語学習者を対象に、習得が難しいとされている終助詞「ね」の習得状況を調査すること、加えて「ね」に対する学習者の認識を明らかにすることを目的としている。理論的基盤として「情報のなわ張り理論」(神尾 1990、2002)を援用し、論文上では次の「ね」の分類を用いている(例文内の S は話し手、H は聞き手を示す)。

1. 「必須の『ね』」(共有)
S: 今日はいい天気ですね。
2. 「必須の『ね』」(意見)
S: ステキなバックですね。
3. 「任意の『ね』」(情報+)
S: ちょっと郵便局へ行ってきましたね。
4. 「任意の『ね』」(情報-)
H: このお肉いくらですか。
S: えーと、それは、250 円ですね。

「必須の『ね』」(共有)は当該の情報を話し手と聞き手側が共有している場合、「必須の『ね』」(意見)は話し手が聞き手の事物を取り上げてコメントする場合に用いるとされている。「任意の『ね』」(情報+)は話し手が当該の情報を十分に持つ場合に、「任意の『ね』」(情報-)は

話し手が十分な情報を持たない場合、協応的態度を表現する目的で用いるものである。

上記の理論的枠組みに基づき、〈研究1〉では、話題を統制したインタビュー形式の「自由会話コーパス」をデータとし、いずれもインタビューされる側の母語話者とレベル別学習者(上級-上、上級-下、中級-上、中級-下の4レベル)における正用、欠落、不自然な「ね」の使用状況について数量的に分析している。学習者の日本語レベルはSPOT (Simple Performance-Oriented Test) によって測定した。研究対象者は母語話者を含む40名である。また、一部の分析ではインタビューする側の母語話者の発話も分析の対象としている。分析の結果、(1) インタビューする側とされる側の発話において、会話に参加する立場によって、インタビューする側は「必須の『ね』」を、インタビューされる側は「任意の『ね』」を多く使用することが示された。(2) 「ね」の使用頻度を日本語の能力別に分析した結果、上級-上は、母語話者に比べて「ね」の使用回数自体は少ない。しかしながら、発話量を考慮し、一定の発話量当たりの使用頻度を算出すると、母語話者より使用頻度が高いことが明らかになった。(3) 正用、欠落、不自然な「ね」の数から算出した正用率に関しては、上級-上では「任意の『ね』」、上級-下では「必須の『ね』」(共有)の正用率が下のレベルより低いことが示された。これは言語習得における「後退現象」「U字型発達曲線」と言えるものであった。つまり、上級-上と上級-下は、必須と任意の「ね」に対して曖昧且つ不安定な認識を持っており、「ね」の使用に迷いが出る時期であると言える。

〈研究2〉は、〈研究1〉における「必須の『ね』」の欠落、「任意の『ね』」の多用および上級-上と上級-下から観察された後退現象について検証することを目的としている。研究方法として、77名(母語話者を含む)を対象に2種類の「ね」の文法性判断テストを行っている。なお、学習者のレベル分けは〈研究1〉と同様、SPOTの結果によって行った。文法性判断テストは、文末に「ね」が付いた「『ね』有り版」、「ね」がない「『ね』無し版」であり、まず、時間制限内に学習者が回答している。そして、両版のテスト終了後に、確かな判断をさせるために時間制限を設けずに、再び「『ね』無し版」テストのみに回答している。このように、各学習者が3回のテストを受けることによって、「ね」に対する学習者の判断の揺れを分析した。つまり、テストに時間制限の有無条件を設けることで、「ね」に対する暗示的知識および明示的知識の双方を調べることを試みている。最後に、学習者にインタビューを行い、解答に関しての判断理由を含めた「ね」に関する認識を探っている。主な結果は次のとおりである。

- (1) 時間制限無し「『ね』無し版」において、「必須の『ね』」(共有)と(意見)では、レベルの上昇とともに正答率が上昇していた。
- (2) 「任意の『ね』」(情報+)ではレベルの上昇とともに母語話者に近づくが、「任意の『ね』」(情報-)では上級-上が、不自然な「ね」では上級-下の正答率が各下のレベルより後退する現象等が見られた。
- (3) 学習者の「ね」に対する判断の揺れを観察するため、3回のテスト結果を比較した結果、「必須の『ね』」(共有)では大きな揺れは確認されなかった。これは、「必須の『ね』」(共有)が相対的に習得しやすいことを示している。しかし、「必須の『ね』」(意見)

では上級-上において解答が揺れていた。

- (4) 「必須の『ね』」では、直感で答える時間制限有りのテストでは正答できても、明示的知識に照らして答える時間制限無しのテストでは間違ってしまうという結果となり、学習者が「ね」に関する確かな明示的知識を持たない実態が示された。
- (5) 「任意の『ね』」および不自然な「ね」では、ほとんどのレベルにおいて大きな揺れが確認された。「任意の『ね』」は時間をかけて考える方が、不自然な「ね」は直感で答える方が母語話者に近い判断ができていた。しかし、インタビュー結果と照合すると、学習者は妥当な明示的知識に基づいて回答したわけではないことも明らかになった。
- (6) 学習者へのインタビュー・データを分析した結果、上級-上の認識は、「任意の『ね』」を「必須の『ね』」と区別しており、曖昧さはあるものの一定の妥当性を示していた。一方、下のレベルは「ね」の意味機能を単純に捉える傾向が確認された。
- (7) 上級-上の正答率が低く、解答が揺れる要因として、「ね」の複雑で多様な機能に気づいていることが明らかになった。「ね」の使用に迷いが生じることが示された。研究1>の産出データおよび<研究2>のテスト結果だけを見れば、上級学習者の習得は後退をしていたが、インタビュー調査の結果、学習者の中間言語において「ね」の多様な機能が相応に組み入れられており、着実に習得が進んでいることが示された。

本研究では、会話データおよびテスト結果の分析に加えて、学習者の持つ「ね」に対する認識を調査した。その結果、熟達度レベル別に中間言語の発達過程を示すことができた。

論文審査結果の要旨

本論文は、「情報の縄張り理論」(神尾 1990、2002)に基づき、これまで研究が難しいとされてきた終助詞「ね」の機能分類を再検討した点で高く評価できる。話題となる情報の所在によって出現が左右される事実がありながら、従来の「ね」の習得研究は、情報の所在という観点からは行われてこなかった。この理論的枠組みに基づいて、日本語学習者の「ね」の使用実態、「ね」に関する暗示的知識、明示的知識の関係を、日本語学習者の熟達度別に明らかにしようとした実証研究は意義がある。また、日本語母語話者と日本語学習者の「ね」の使用状況(数量、頻度等)について発話量を考慮に入れた使用頻度を指標として比較した点も興味深い。使用の実態は、日本語能力が向上すれば単純に日本語母語話者に近づくというわけではなく、習得過程では後退現象(日本語レベルが上の段階で正用率が下がること)が生じていることも示されている。上級-上では「任意の『ね』」を母語話者より3倍近く多用する過剰使用の実態

があること、インタビューで学習者の認識を調査した結果、学習者は「ね」に関する明示的知識は持たないが、上級-上のレベルでは「ね」の多様な機能に気づいていることも示され、学習者は「ね」を付けるかどうかの基準を持っているわけではないことなどにも言及され、「ね」の習得を多角的に捉えようとした意欲的な研究と言える。

しかしながら、「ね」の使用の分析について、いくつかの疑問も残る。例えば、「ね」の使用に関しては、日本語母語話者も含めて個人差が大きい理由は何か、学習者の習得にも個人差があり、それは何に起因するのか、任意の「ね」はそもそも「任意」であるため、なくてもよいとも考えられる中で、不自然な「ね」とされるものと許容される「ね」との境界線はどこにあるのか。また、学習者は「ね」に関する明示的知識を持っていないとするならば、明示的知識を与えれば習得は本当に進むと言えるのだろうか。これらを今後の課題として研究をしていくことが求められる。

研究全体としては先行研究を丁寧に整理し、終助詞「ね」の産出を自由会話（コーパス）、文法性判断テスト、インタビュー・データを用いて分析し、習熟度別に学習者の習得過程を示した点は評価できる。海外で学ぶ日本語学習者の多くは「ね」の機能を独力で学んでいる可能性も高いことから、本研究の結果は日本語教育の現場に示唆を与えるものでもある。よって、審査委員会は全員一致で、申請者に対し、博士（文学）の学位を授与するのが適当であるとの結論に達した。